

東シチリアの旅

一昨年行った南イタリアのプーリア地方は古代、「大ギリシア」と呼ばれたほどギリシアの植民都市が多かったところである。それに劣らずシチリア島もギリシア植民市が多い島だった。島の西部はフェニキア人が先に入植していたが東部はギリシアの都市国家が多く進出した所で、今も遺跡や遺品など多くを残している。

〈イスタンブール経由カタニーヤへ〉

東シチリアの中心都市カタニーヤ行きのトルコ航空はイスタンブール乗り継ぎで、その乗り継ぎ時間が12時間を超えていたため、トルコ航空の規定によりホテルが利用できると聞いていたが、その通りカウンターで手続きをし、バスでイスタンブール郊外のホテルへ案内された。これが我々の旅行では敷居の高すぎる5つ星ホテル、朝食、休憩、ランチと豪華な気分を味わえた。結果的に今回の旅行では最高の待遇で幸先良いスタートとなった。前回パリで危うく「ホテル難民」になりかけた苦い経験から、今回は1泊目のカタニーヤと正月を挟むシラクーザの3泊を海鷗で予約してもらっていたので心配なく夜のカタニーヤに到着。ホテルは街の中心地でベランダからはクリスマス商戦でにぎわう街の風景が楽しめた。また部屋からローマ時代の劇場後も眼下に見ることができ、いい部屋だったので旅の最後の2日間同じ部屋を予約したかったのだが残念ながらすでに予約が入っているとのこと。近くのホテルで狭いが中庭に面した部屋があり、しかも1泊60€と安かったので予約して鉄道でメッシーナに向かった。左手にシチリア最高峰の雪を戴くエトナ山



右手に青い海とイタリア本土の山々を眺めながらメッシーナ到着。

〈海峡の町メッシーナ〉

この町は本土から鉄道がフェリーを通じて直結しており、いわばシチリアの玄関口とも言える町である。ここに来た目的はバロックの画家カラバッジョの2点の絵と、対岸の町にある「リアーチェのブロンズ像」2体を見ることだった。駅前のホテルで3泊分確保してから早速、海沿いを走るトラムで市立美術館へ。殺人犯として逃亡生活が続ける中でシチリアに立ち寄ったカラバッジョが残した作品、「ラザロの復活」と「羊飼いの礼拝」



という二つの大作が展示された特別室では他の観覧者もなく二人だけでゆっくり心行くまで堪能できた。やはりカラバッジョらしく明暗のはっきりした、人の目を引き付けて離さない迫力のある作品だった。これだけでシチリアに来た目的の半分は達成できたというのはちょっと大げさすぎるかもわからないが。余韻を残しながら今度は町の高台を走るバスで眼下の港町メッシーナと狭い海峡越しに本土の山並みを眺めながらホテルに帰着。

翌日連絡船に乗り30分余りで本土側のレッジョ・ディ・カラブリアに到着し早速国立博物館へ。この目玉「リアーチェのブロンズ像」は



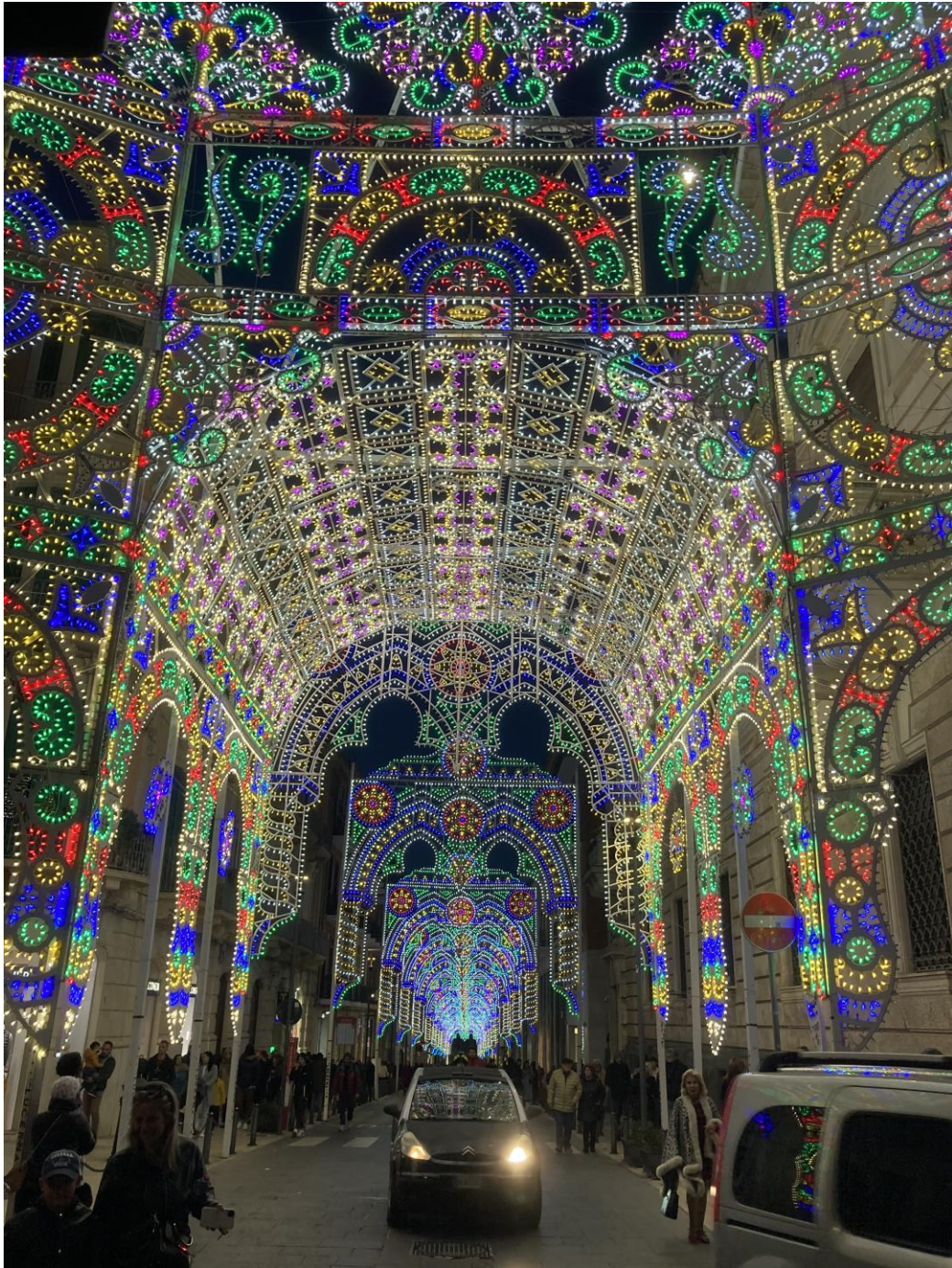
1972年カラブリア州のリアーチェの沖合海底から引き揚げられた2体の戦士像である。紀元前5世紀に沈没したギリシア船とともに2000年以上海の底に沈んでいたものである。それにしては保存状態もよく筋肉の構造までわかるほど迫真力のある作品である。古代ギリシアの彫刻のレベルの高さを改めて感じる事ができた。

〈アルキメデスの活躍したシラクーザ〉

メッシーナから島東南部のシラクーザへの列車の旅、走り出してしばらくすると検札が回ってきたがここで大きな失敗をしたことが分かった。イタリアでは鉄道に改札がなく切符を買って乗車前にホームにある機械で刻印をしなければならないことをすっかり忘れてしまっていたのだ。弁解を聞いてもらえるはずもなくやむなく10€の罰金を払う羽目に。

そんな悔しい思いもしたが、なんとかシチリア訪問の大きな目的でもあったシラクザーに到着。古代ギリシアの都市国家コリントスの植民都市として発展し、半島南部を含む「大ギリシア」の中心都市だっただけに遺跡も多い。有名なアルキメデスも実はこの都市の住民でローマ軍との戦いで戦死したという。

町の背後には古代の石切り場跡と壮大な劇場跡がありそこから青い海に面したシラクザーの町とその先にオルティージャ島が見える。オルティージャ島は古代のシラクザーの中心地で今も観光客が集中する。50mくらいの狭い水道にかかる橋を渡ると丘状になった島全体に迷路のような旧市街が広がる。アポロ神殿の廃墟と島の中心アルキメデス広場を結ぶメイン道路は年末年始とあって見事なイルミネーションのトンネルが続く。



さすが「ルミナリエ」の本場イタリアだけのことはあり、それを眺めながら広場で食べた夕食は楽しい思い出となった。

オルティージャ島の教会にあると聞いていたカラバッジヨの作品「聖ルチア埋葬」を見るために教会に行くと、今は本島側の教会に移されたとのことで本島まで戻りやっとその教会を見つけ作品と対面。メッシーナの作品より小さくしかも教会内は暗いので細部までわからなかったのは残念だがとにかくこれでシチリアのカラバッジヨ 3 作品を見られたので満足。正月というのに海では日光浴をする人や泳ぐ人までいるのには驚いた。北ヨーロッパの人たちはこの青い空と海を見ると海に入りたくなるのだろうか。

〈山岳都市ラグーザ〉

これまで海岸線に沿った旅だったが、次の目的地へは山地に入っていく。内陸の切り立った崖の上に広がる中世の町ラグーザである。鉄道駅から深い崖にかかる橋を渡ると新市街、そしてそこから急斜面の下に旧市街が広がる。まさに山岳都市である。こんな要害のようところに都市を作ったのは侵入者から追われた先住民だったと言われる。これまで見てきた沿岸都市とは全く印象が違う都市である。ちょうど旧市街では葬儀があり、神父に導かれて厳かに大聖堂に入っていくのに出会った。しかし過疎化の影響か観光客以外に町行く人の姿は少ないのが気にかかった。

〈再びカターニャへ〉

ラグーザから今度はバスで最初の到着地カターニャへ向かう。左手にはエトナ山が見え隠れする。ここ数日の暖かさで雪の量が減っているようにも感じる。

カターニャでは予約していたホテルへ。カターニャには大聖堂やギリシア劇場などの遺跡も散在するがエトナ山の噴火で町が壊滅するなどの被害も受けたせいかシラクーザほど遺跡が集積しているとは言えない。しかし町の賑わいはシチリア東部では一番のようである。この町出身のオペラ作曲家の名を頂くベッリーニ劇場があり、土曜日の夜にコンサートがあると分かったがチケットを買う場所が見つからない。とにかく開演 4 5 分前に劇場に行くとすでに 1～4 階の席は売り切れ、5 階バルコニー（いわゆる天井桟敷）のチケットを何とか購入できた。中に入って見ると外観の古めかしさから想像できないほど内部はきらびやかで天井画も鮮やかだった。5 階の端の方の席だったので舞台の半分しか見えなかったが音楽を聴くには特に支障はなかったし、天井画が間近に見えて十分満足できた。聴衆は地元のお年寄りが多かったようだがすばらしい劇場で土曜の夜を芸術鑑賞で過ごすことのできる人たちがうらやましい。終演後、過去のオペラ公演などのポスターが貼られた劇場近くのレストランで余韻を楽しみながらシチリア最後の夜を過ごした。

素晴らしい風景と豊かな歴史遺産、おいしい料理、「マフィアのシチリア」のイメージとは全く異なる、心がほっこりするシチリアの旅だった。 （土代 武）